

数理科学研究科

I	研究水準	研究 11-2
II	質の向上度	研究 11-3

I 研究水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

1. 研究活動の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究活動の実施状況」のうち、研究の実施状況については、平成 19 年度の教員（准教授以上 56 名）の著した欧文による査読付き論文の数は 84 件あり、一名当たり平均約 1.5 件になる。数学の研究論文数は、他分野に比すと概して少ない実態をかんがみると論文の数は十分多いといえる。また、海外の研究集会、国際会議等での口頭による研究発表の数は、平成 19 年度、81 件に達するなど、非常に多く、研究の質の高さが国際的に広く認識されている証しである。数学分野における社会との連携状況、特許出願等は、伝統的に少ないが、民間企業の研究者を客員教授として招聘するなどして研究成果を幅広く上げ、着実に研究を進めている。研究資金の獲得状況については、科学研究費補助金は、平成 19 年度で総計 60 件獲得であり、そのうち 2 件は基盤研究 (S) を獲得していることは、優れた成果である。

以上の点について、数理科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究活動の状況は、数理科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

2. 研究成果の状況

期待される水準を上回る

[判断理由]

「研究成果の状況」について、学術面では、純粋数学及び応用数理の面で優れた研究成果が数多く生まれている。純粋数学での卓越した研究成果として、核関数と幾何の新研究、フォン・ノイマン環の分類理論、ルビン・テート群についての加藤の明示公式の一般化、多重ゼータ関数の特殊値の研究等がある。応用数理での卓越した研究成果として、ウェーブレットを用いた錯視の研究、非同期修正の不要な新しい統計量の研究等がある。平成 19 年度に、各種の学術賞を 4 件受賞している。また、過去 4 年間の受賞総数は、国内学会賞 8 件、海外学会賞 1 件の計 9 件であり数学関係としては非常に多い。これらの状況などは、優れた成果である。

以上の点について、数理科学研究科の目的・特徴を踏まえつつ総合的に勘案した結果、研究成果の状況は、数理科学研究科が想定している関係者の「期待される水準を上回る」と判断される。

と判断される。

II 質の向上度

1. 質の向上度

大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している

当該組織から示された事例は3件であり、そのすべてが、「大きく改善、向上している、または、高い質（水準）を維持している」と判断された。